

## 平成 30 年度 教育・学生支援センター自己評価報告書

## I 教育

## 1. 主な活動

<p>①教育の質の向上に関する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全学の FD/SD 研修会の企画及び学部 FD 研修会講師として貢献し、全教職員の FD 参加率 75%以上という目標を達成した。</li> <li>・<u>シラバスシステムを刷新し、シラバスを基軸とした授業運営ができるようにした。</u></li> <li>・<u>ディプロマ・サプリメントを開発し、3 ポリシーの教育の成果を点検・検証できるようにした。</u></li> <li>・全学学生調査「学習カルテ：アンケート」の全面的な見直しを行った。</li> </ul> <p>②入学者確保のための取組</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 30 年度入試の志願者、受験者、入学者ごとの入試成績の分析を行った。</li> </ul> <p>③学生支援の充実に関する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生支援の方針」を策定した。</li> <li>・<u>「授業の計画、実施、点検・評価、改善のための基本方針」を策定した。</u></li> <li>・<u>「とって元気！宮大チャレンジ・プログラム」のコーディネートを行った。</u></li> </ul>
---

## 2. 特筆すべき取組や成果

## (1) 優れた点、特色ある点

平成 30 年度から刷新したシラバスシステムは、学習目標（到達目標）に掲げた事項を、成績評価においてどのように判定するのかを対応づけて表記するようにした。また、毎回の授業計画を作成するようにし、日時、教育内容・方法、授業外の学修の指示を具体的に記入するようにした。さらに、シラバスシステムと学習管理システム(LMS)を統合したシステムにしたことで、教材の配信、テスト、アンケート、学生への通知が行えるようになり、シラバスを基軸とした授業が行えるようになった。

ディプロマ・サプリメントの開発を行い、3 ポリシーに則った教育の効果の検証が行えるようになり、これに基づき 2020 年度を目処に卒業認定が行えるような仕組みを作った。

教育質保証・向上委員会に「授業の計画、実施、点検・評価、改善のための基本方針」を提案し、決定した。これを受けて、新入生全員に対して「主体的な学びを実践するために」というパンフレットを配布し、学生・教員間で学修に取り組む姿勢・態度を共有することができた。

「とって元気！宮大チャレンジ・プログラム」事業において平成 30 年度は、全 25 件の応募企画（うち 17 企画が採択）のコーディネートを行い、企画書の書き方から経費の使い方、各プロジェクトの進捗状況について定期的に必要な指導を行った。その結果、2 月の成果発表会において、学長賞 1 件、優秀賞 2 件が選ばれた。

## (2) 改善された点（または今後改善を要する点）

本学のシラバスは、平成 19、26 年に受審した認証評価において改善事項として指摘を受けてきており、教育・学生支援センターでは継続してシラバスの開発を行ってきた。平成 30 年度のシラバスの刷新により、課題が改善された。

ディプロマ・サプリメントの開発により、教育の成果の検証には、カリキュラム・マトリックスの見直しが必要なことが明らかになった。2019 年度はその改善に取り組む。

シラバスの刷新及び「授業の計画、実施、点検・評価、改善のための基本方針」を策定し主体的な学びを実践することで、学習時間の増が図られるように、継続して活動に取り組む。

## 3. 活動状況の自己評価

良好である おおむね良好である（標準） 不十分である

判断理由

全学的な FD/SD 研修会を企画し、参加率 75%を達成している。シラバスシステムを開発し全学的に運用している。3 ポリシーの教育の検証ができる仕組みを開発している。これらの取組は、教育・学生支援センターが主導的に行っているものであり、教育の質の保証の向上に貢献している。以上のことから、活動状況は良好であると判断した。

## II 研究

### 1. 主な活動

#### ①教員の研究推進

・内部質保証及び教育方法の開発の研究を推進し研究成果を発表した。

#### ②研究プロジェクトの推進。

・学外の研究者との連携によって大型研究プロジェクトを推進した。

・学生支援部と共同で学生調査設計に関する研究会開催した（年 24 回）。

#### ③外部研究資金の獲得

・科研費等の外部資金を獲得した。

### 2. 特筆すべき取組や成果

#### (1) 優れた点、特色ある点

##### ①教員の研究推進

教育と研究の有機的な連携と相乗効果が本センターの研究活動の特色となっている。田中・武方(2019)の分析では、学術的調査の結果をより効果的な教育改善につなげる努力が、藤埴(2018)では、主体的な学びの事例調査に基づき、アクティブ・ラーニングの推進につなげる努力が払われている。

##### 【研究紀要の企画、編集、刊行】

・『教育・学生支援センター紀要』第3号に研究論文2編、実践報告3編を掲載。

##### 【主な論文と学会発表】

田中秀典・武方壮一, 2019, 「学生アンケートの結果からみる宮崎大学の学部生の傾向：ポリシーの周知度と身につけた資質・能力の相関」『宮崎大学教育・学生支援センター紀要』3: 1-6.

藤埴智一, 2019, 「学部におけるエンジニア育成の現代的課題：環境適応能力と主体性を育成する自己決定学習の役割に着目して」『宮崎大学教育・学生支援センター紀要』3: 7-24.

藤埴智一, 2018, 「大学生の主体的な学び：地方大学工学部の事例」大学教育学会第40回大会発表, 筑波大学, 2018年6月10日（同発表要旨集録, 130-31）.

##### ②研究プロジェクトの推進

「キャリア・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究」（基盤研究A, 25245077, 研究代表者吉本圭一九州大学教授）では、日本版国家資格フレームワーク策定について検討を重ねた。

##### ③外部研究資金の獲得

・「アクティブ・ラーニングによる学士課程教育の刷新とそれを可能にする組織開発」（基盤研究B, 15H03488, 直接経費 2,150,000 円, 間接経費 645,000 円）

・「大学における深い学習の観察と開発」（挑戦的萌芽研究, 16K13553, 直接経費 800,000 円, 間接経費 240,000 円）

・「持続可能な大学組織の探索：組織の規模と範囲・組織間関係の現状・変容・存続の分析」（基盤研究B, 16H03780, 直接経費 50,000 円, 間接経費 15,000 円）

#### (2) 改善された点（または今後改善を要する点）

『教育・学生支援センター紀要』の刊行と附属図書館のリポジトリへの登録によって、センターに関連する研究活動を体系的に編纂し、結果を広く公表することが可能になり、それに向けた取り組みが前進した点。

### 3. 活動状況の自己評価

良好である おおむね良好である（標準） 不十分である

#### 判断理由

研究課題と研究成果はいずれも宮崎大学の教育改善と質保証に深く関わっている。学外の研究者との連携によって大型研究プロジェクトを推進している。外部研究資金も継続して獲得している。

以上のことから、活動状況は良好であると判断した。

### Ⅲ 社会連携、国際交流等

#### 1. 主な活動

##### ① 高等教育機関との連携

- ・ 高等教育コンソーシアム宮崎の事業全般に係わる企画と運営に参画。
- ・ 高等教育コンソーシアム宮崎の公募型卒業研究テーマ事業を運営。
- ・ 高等教育コンソーシアム宮崎の FD 事業を運営。

#### 2. 特筆すべき取組や成果

##### (1) 優れた点、特色ある点

##### ① 高等教育機関との連携

##### 【高等教育コンソーシアム宮崎】

公募型卒業研究テーマ事業の企画を行い、宮崎の課題解決に貢献した。宮崎大学を含む 5 機関が 22 件の研究テーマを採択し、研究成果発表会において課題解決の成果を報告した（平成 31 年 3 月 2 日、宮崎大学創立 330 記念交流会館コンベンションホール、参加者 86 名）。公募型卒業研究テーマ事業の研究成果発表会ではアンケート回答者の 3/4 が課題解決の到達度について「よい」あるいは「たいへんよい」と回答し、この結果は、本事業に対する関係者の満足度が非常に高いことを示している。

同 FD 事業において異分野融合教育の推進に関する研修会を開催した（平成 30 年 9 月 19 日、宮崎大学創立 330 記念交流会館コンベンションルーム、講師：琴坂信哉埼玉大学大学院理工学研究科准教授、題目：異分野融合によるものづくり人材育成、参加者 20 名）。FD 研修会参加者のアンケートでは「非常に有益な取り組みで素晴らしいチャレンジ」「悩んできたことを共有できてありがたかった」「いろいろな先生の話が聞けて有意義であった」などの高評価を得た。また、94%が内容に興味を持てたと回答した。

##### (2) 改善された点（または今後改善を要する点）

公募型卒業研究テーマ事業をとおして地域社会との連携が深まっている。また、学生による課題解決の質が向上している。研究成果発表会では本学の工学部 4 年生の学生が最優秀賞に、農学部 3 年生の学生がベストポスター賞にそれぞれ表彰された。

#### 3. 活動状況の自己評価

- 良好である     おおむね良好である（標準）     不十分である

##### 判断理由

平成 16 年度に高等教育コンソーシアム宮崎が設立されて以降、本センターの全教員がコンソーシアム事業に積極的に関わり、事業を推進してきている。公募型卒業研究テーマ事業では宮崎の課題解決に貢献した。コンソーシアム参加校による FD 研修会を毎年開催しており、教育力の向上を図っている。

以上のことから、活動状況は良好であると判断した。

## IV 業務運営

### 1. 主な活動

- ①全学委員会の活性化  
 ・教育・学生支援センター教員は、教育に関わる全学委員会構成員に組み込まれており、各委員会において積極的に活動した。
- ②・中期目標・中期計画  
 ・中期目標・中期計画の教育に関わる事業を推進した。
- ③兼任教員  
 ・IR推進センターの兼任教員として、教学IRを推進した。
- ④学生生活実態調査の充実に伴う「学習カルテ：アンケート」の見直し
- ⑤高等教育無償化制度に係る機関要件への対応
- ⑥学生ボランティア活動支援

### 2. 特筆すべき取組や成果

#### (1) 優れた点、特色ある点

教育・学生支援センターは、大学教育委員会、教育質保証・向上委員会、FD 専門委員会、4 学期制実施専門委員会、キャリアサポート専門委員会、基礎教育部の委員会、図書委員会に参加し、教育改善に関する取り組みを推進している。特に教育質保証・向上委員会においては、内部質保証に係わる、実施体制、評価基準、改善の手順等を提案し、教育の内部質保証のシステム作りに貢献した。さらに、平成 30 年度は教育に係わる定量的なデータ収集及び内部質保証の整備の現状を把握するために、モニタリングを実施し、改善点の洗い出しを行った。

第 3 期中期目標・中期計画の教育に関わる事業の統括としての企画および実施状況の取りまとめを行い運営交付金の獲得に貢献した。

④「学習カルテ：アンケート」の中で行っていた学生生活実態調査の充実を図るため、当該アンケートの全面的な見直しを行った。設問数も「学習関連」と「学生生活関連」がほぼ同数となるよう、またアンケートが学生の負担にならない程度に質問項目を精選した。その結果、学生の悩みや大学の相談窓口の認知度、アルバイト、サークル活動、ボランティア活動などに関する新たな学生情報が得られるようになった。

⑥平成 30 年度に入ってから「大阪北部地震」、「西日本豪雨」など大きな災害が立て続けに発生したことから、学生支援部門では、学生ボランティア活動支援室を通して、その都度、学生に対し「災害ボランティア活動等に関する留意事項」を学生支援部のウェブサイト等において掲載し、注意喚起を促した。また、昨年に引き続き、宮崎市民活動センター等と連携し、「ボランティア入門講座」を開講し、ボランティアの意味や留意点等について講義を行った。

#### (2) 改善された点（または今後改善を要する点）

平成 29 年度に行った全学委員会の再編にあたり、教育質保証・向上委員会、大学教育委員会、FD 専門委員会に積極的に参与し、機動的な委員会運営ができるようになった。

④「学習カルテ：アンケート」の見直しを図る過程において、それまで多種多様のものが存在していた本学の学生アンケートを集約化することができた。

### 3. 活動状況の自己評価

- 良好である    おおむね良好である（標準）    不十分である

#### 判断理由

教育・学生支援センターがその設置目的に則り、全学委員会に積極的に関わり、教育の改善に取り組んでいる。特に、教育質保証・向上委員会においては、教育の内部質保証システムの構築に貢献した。また、学生アンケートの整理・充実化、新たな高等教育無償化制度に対する迅速な対応、学生ボランティア支援を行うなど教育・学生支援センターの貢献度は高い。

以上のことから、活動状況は良好であると判断した。